



虚子記念文学館報

2025年5月
第44号

珠玉の虚子晩年小説



微笑ましい往復書簡を中心に――

令和七年四月一日～令和八年三月八日

戦後の虚子は、大佛次郎の勧めにより昭和二十二年新年号「苦楽」に「虹」を発表し、小説家として復活しました。その後も「虹」連作や「國子の手紙」「新橋の俳句を作る人々」等を経て、二十六年七月号「中央公論」に「椿子物語」を書き下ろします。



「椿子物語」が初めて
発表された「中央公論」
昭和26年7月号

その頃の虚子は、前年十二月に患った軽度の脳溢血のため左半身が麻痺し、舌がもつれる等で二週間余り病臥し、「ホトトギス」の雑誌選者も二十六年三月より年尾と交代していました。従って、虚子の選を受けられ



「椿子物語」の発表間もない頃の虚子(77歳)と叡子(21歳)
昭和26年9月19日、子規50年祭で訪れた道後鮎屋別荘にて撮影。

この「椿子物語」のヒロイン千原(旧姓安積) 叡子氏が令和二年に九十歳で亡くなられ、長女葉子氏より、虚子叡子往

ず淋しく思っていた俳人達にとつて、「椿子物語」は待望の虚子作品だったのです。

復書簡を昨年御寄贈いただきました。

また、俳誌「円虹」主宰の山田佳乃氏からは、晩年の虚子小説に欠かすことの出来ない、京極杞陽が主宰した俳誌「木兎」を多数御寄贈いただきました。記して深謝申し上げますと共に、この機に「椿子物語」「絵巻物」といった、虚子晩年の作品をご紹介します。

《徳兵衛から女人形を贈られる》

そもそも「椿子物語」は、昭和二十三年二月、浅草橋にある人形問屋「吉徳」の十代目社長山田徳兵衛が、俳号「土偶」命名の御礼にと、約40cm程の市松人形を贈ってくれた事に端を発しています。



「椿子人形」
千原葉子氏蔵

ちょうど虚子庵の庭の椿が美しい頃であったことから、虚子は人形を「椿子」と名付け、俳小屋(書齋)に飾りました。そして徳兵衛に贈った「椿子」と名づけて側に侍らしめ」の句の通り、椿子を側近の侍女として待らせていたのです。

もともと虚子は、赤い単弁の黄色い薬を抱いた、素朴な山椿が好きで、庭に何本も植えていました。疎開先の小諸には椿の木がなかったこともあり、鎌倉へ戻った二十二年末から翌年の早春にかけての赤椿に、虚子は改めて魅

せられたようです。数ある椿の句の中でも、二十三年に詠まれ、「椿子物語」にも登場する左三句は、虚子代表句と言えるでしょう。

造化また赤を好むや赤椿
小説に書く女より椿艶
椿艶これに対して老一人



椿茶碗



椿茶碗「造化また赤を好むや赤椿」



椿茶碗「造化また赤を好ミテ赤椿」

茶碗の椿の絵は陶工によるものです
が、「造花また赤を好みて赤椿」は虚子
による染筆で、箱裏には「赤を好むや」と
添削された句形で揮毫されています。

この椿茶碗は、もともと虚子の次女
立子が所蔵していたものですが、成
瀬正俊から叡子へと受け継がれ、当館
開館時に、叡子より当館へ御寄贈いた
だきました。

虚子の戒名には「虚子庵高吟椿寿居
士」と椿の一字が入り、「虚子」と言えば
椿」のイメージが定着していますが、
椿への特別な思いは、人形を贈られた
二十三年に始まっています。

《椿子の活躍》

小唄を嗜むホトトギス俳人大麻唯男
から歌詞を所望された虚子は、早速椿
子を題材に、「女人形」という小唄を試
みました。

女人形

女人形をおそばに置いて
あけくれ眺めしやんすが気がかりな
わしや人形に怪気する

この艶っぽい歌詞に名取の吉村柳が
節附けし、後にレコードにも吹き込ま
れています。

また翌二十四年のお正月には、虚子
庵初句会に訪れた俳人達を、椿子は日
の丸の旗を持って歓迎しています。そ
んな椿子に関するエッセーが、「美しい
暮しの手帖」二十四年冬号にまとめられ
ました。現在も続く「暮しの手帖」は、
家庭で製作出来る実用的な洋裁や料理の

記事がメインですが、里見弴や田本文子、
森田たまといった約三十人もの文筆家が
寄稿し、女性雑誌の中でも文芸色の濃い
雑誌です。虚子の投稿はこの六号のみで
すが、「椿子」から虚子の嗜好や日常の
暮しぶりが、手にとる様に窥えます。



「美しい 暮しの手帖」
6号 24年冬

椿子と名付けて側に侍らしめ
即ち此七八つの女人形は、私の
側近の侍女といふことになりました。
た。さうしてだん／＼親しみが増
し、愛情が加はつて来るやうな心
持があるのであります。(中略)
此の人形に魂が這入つて来て、
小西来山の女人形か、左甚五郎の
京人形のやうになつてくれ、ば
い、と思つてゐます。

椿子に絵日傘持たせやるべきか
この数行からも、椿子への愛情を読
み取ることが出来るでしょう。しかし
虚子の次女立子は、書斎に入る度「何
だか怖いわ」と、椿子を気味悪がっ
ていました。そう言われると暗い電燈
に照らされた椿子は確かに少々不気味
な気がするとも、虚子は正直に漏らし
ています。物に対する執着心に乏しい
虚子は、可愛いがつている人形ではあ

るけれども、所持するに相応しい人物
が現れれば、いつ譲つても構わないと
も考えていたようです。

エッセー「椿子」が「美しい 暮し
の手帖」に掲載されたことは、「ホトトギ
ス」や「玉藻」に広告されておらず、
ホトトギス俳人でも記事を読んだ人は
少数でした。奇しくも叡子は、これを
京都の本屋で偶然手に取り、虚子の名
を見つけて購入していたのです。

《叡子が虚子庵を訪問》

エッセー「椿子」読後から約一年を
経た二十五十一月、東京の親戚宅に
滞在していた叡子は、同郷和田山の古
屋敷香律に伴われ、午前中は雨の中江
ノ島へ行き、昼前に鎌倉由比が浜の虚
子庵を訪問しました。香律は数年前か
ら和田山の女性を虚子庵のお手伝いさ
んとして幹旋しており、虚子の妻系と
も懇意にしていました。

虚子は午後から句会があるため、二
人は虚子夫妻と共に昼食を御馳走にな
り、御猪口一杯のお酒で乾杯しました。
二十一歳の叡子はこれまでお酒をほと
んど飲んだことがなかったのですが、
空腹で寒かったため、勧められるまま
スツと飲み干してしまつたそうです。
すると忽ち耳まで真赤になり、動転し
て立ったり座ったりしたとか。そんな
叡子を虚子はニコニコしながら見守り、
後日「この女この時艶に屠蘇の酔」と、
お酒を屠蘇の酒に替えて句作し、新年
句会で発表しています。

そして虚子が句会へ出かけた後、妻
の糸に連れられ俳小屋を覗いた叡子は、
椿子と初めて対面し、即座に一年前の
虚子エッセーを思い出したといひます。

《叡子の父・盲俳人安積素顔》



前に立つ叡子の肩に手を掛け
ている父素顔と母と子

そもそも叡子の父素顔は、ホトトギス
俳人でした。叡子が生まれて三ヶ月後に
網膜剥離のため失明し、生きがいを求め
て戦争中の十七年頃より泊雲に師事し、
「ホトトギス」に投句しています。十九
年の泊雲没後は、豊岡の杞陽が素顔居を
訪問して指導しました。若い頃から絵画
や演劇に造詣が深かった素顔は、杞陽と
も臆することなく話し、二人は互いに共
鳴する所が多かったといひます。

虚子が素顔や叡子と初めて出会った
のは、戦後間もない昭和二十年十一月。
泊雲の墓参と、戦災で家が全焼し和田
山の香律居に間借りしていた年尾一家
を見舞う目的で但馬・丹波を訪れた虚
子と立子は、和田山の叡子の父素顔居
にも一泊しました。安積家の墓に二人
も参り、蓼川辺りを吟行して夜句会を
行っています。吟行中、盲目の素顔は
杖を持たず、長女叡子の肩を杖代りに
虚子を案内しました。また句会中、素

顔に句を読み聞かせたり、素顔の句を詠み上げたりするのも、叡子の役目でした。虚子は当時十五歳だった叡子に何か話しかけたそうですが、叡子は緊張の余り、何も答える事が出来なかったといひます。虚子は日頃おしゃべりな娘達に囲まれて生活していましたから、寡黙な叡子を気の毒に思ったようです。

その後素顔は「木兎」で活躍し、二十一年十月号「ホトトギス」では、「乾坤に」擲ぐれし大夕立」が虚子選雑詠巻頭に輝く快挙を成しました。しかし、大地主ゆえ農地改革による心労が夥しく、叡子が同志社高等学校在学中の二十四年一月に四十七歳の若さで亡くなりました。虚子は「何よりも取り戻したる花明り」を手向けています。

叡子と再会した虚子は、まず素顔の在りし日の姿を思い浮かべたでしょう。そして五年前、父に肩を貸しつつ俯いて歩いてきた少女が、すっかり柔和で明朗な女性に成長していたことが、虚子には大層嬉しかったのです。

《虚子の心を動かした叡子の御礼状》

叡子訪問後、軽い脳溢血で二週間程病臥していた虚子は、二十六年一月十八日、久しぶりに滞っていた手紙に目を通し、その中の叡子の御礼状に感ずる所があったのでしよう。「玉藻」三月号「俳諧日記」に書簡の一部を紹介しています。

鎌倉に伺った日の事をなつかしく、うれしく想ひ出して居ります。

御多忙中でございますのに、ゆつくりと御目もじ出来、感激致して御別れ申しました。何も彼もかなしい程、おなつかしく思ひ起します。(中略)父の在りし日をなつかしみました。母も父を思ひ出して居たに違ひないと思ひます。

なお、「椿子物語」の本文にはかねて承つてをりました椿子さまにもお目にかゝりました。これが常に先生のおそばにあつて明け暮れをお慰めしてゐるのかと思ふと、おなつかしく思ひました。

と、椿子に関しても記されています。実際の手紙は小説に用いられた時点で処分されてしまったのか、残念ながら現存しませんが、おそらく叡子のお礼状には、椿子に初めて対面出来た喜びが、素直に記されていたと想像されます。五年振りの出会で叡子に大変親近感を持った虚子は、これからは素顔の代りに叡子が俳句に精進してくれることを願ひ椿子をプレゼントしたのでしよう。

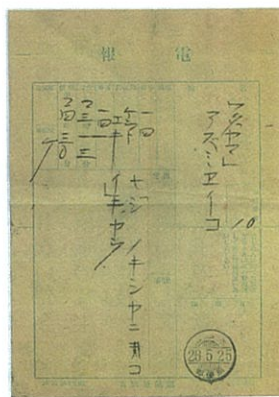
《椿子譲渡の打診と到着》

「椿子物語」は小説ではありませんが、登場人物は皆実名で記され、内容もほぼ事実が描かれています。小説の本文中に椿子受渡しに関する日時の記載はありませんが、叡子宛虚子葉書によって、その詳細が見えて来ました。

叡子への第二報は二十六年四月三日虚子葉書で、「貴女に椿子を贈物にしようかと思つてゐますが、お受取り下さいま

すでせうか」と打診がありました。この時叡子も母とし子も、まだ半信半疑だったようです。そして四月十日に「本日荷造りをして、椿子をお届けいたします。お受取り下さいまし」と、発送した旨の葉書が届き、叡子は十二日に受け取っています。この日は時雨の多い和田山には珍しく、快晴だったそうです。

また、「椿子物語」で杞陽が持ち帰る人形の硝子ケースについて本文は、「椿子の箱、只今伊吹山麓を通過。五月二十五日朝、米原駅」という虚子宛杞陽電報で物語は幕を閉じます。その後叡子は杞陽から左の電報をもらひ、朝七時の和田山駅に駆けつけました。



叡子宛杞陽電報
(26年5月25日)

つまり五月二十四日、ケースを「恋の重荷」と抱えて虚子庵を出た杞陽は、横浜から夜行に乗って二十五日朝米原に到着。さらに杞陽は京都駅から叡子へ「七ジノキシヤニコイ キヤウ」と電報を打ち、小説の記述通り、五月二十五日に叡子の許へ届けられたのでした。

《「椿子物語」執筆から提出まで》

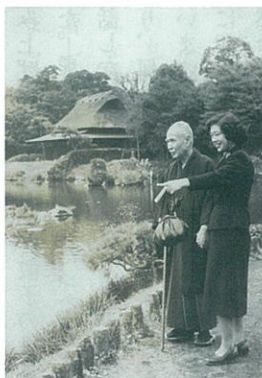
四月二十一日、椿子を譲った後の虚子葉書に「いづれ手紙か文章かで、椿



ガラスケースに入った椿子を抱え、毎日新聞社の取材に応じる叡子 26年12月撮影

子のことを申し上げ度いと思ひます」とあるように、四月下旬頃より執筆を始め、五月二十六日に脱稿しています。脱稿の五日前から杞陽は鎌倉に来ており、二人の間で小説に関する意見交換があったであらうと思われまふ。

そして翌二十七日の山会(文章会)で、虚子は皆の前で朗読しました。山会参加者には大変好評でしたが、この時まだタイトルが付いておらず、虚子は「老の恋」にしようかと笑っていたとか。そして五月三十日、六月一日の二日間増補訂正を施し、タイトルは、叡子宅で開催された椿子歓迎会での京極昭子の句「行く春の卓に椿子物語」から「椿子物語」と命名されました。結局叡子に相談する時間が取れず、六月五日叡子宛葉書には「あなたに一度原稿を御検閲願つてお許しを得てからにしたいと思ひましたが、原稿を書いてしまふと同時に呉れとのことであつたので、やつてしまひました」とあります。また、六月十九日虚子葉書には「御叱りがなく安心致しましたが、少しは叱られてみたい様な心持も致します」と



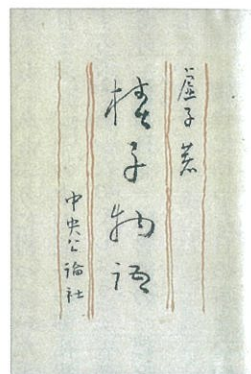
昭和27年11月14日、熊本水前寺公園吟行中の虚子と叡子

《「絵巻物」に叡子が再登場》
二十七年五月、叡子は虚子一行と共に、堅田、比叡山、浮御堂、京都東本願寺、高野山等を巡り、行く先々で足元の危ない虚子の手を取り吟行しました。これは「椿子物語」の次の小説「絵巻物」の第七章「美人手を貸せば」において、次のように描かれています。

おどけ、叡子を笑わせています。



単行本『椿子物語』昭和26年9月25日 中央公論社
装幀は津田青楓、題字は虚子。



手を執るのに慣れない人は、力を入れてぐつと手を引き上げるので、私は巡査に掴まされてゐる様に、其人に吊し上げられて歩かねばならぬ。叡子さんは慣れてゐて、軽々手を貸してゐて、つまづきでもした時には力を入れる。これは長年素顔君を介抱してゐた経験から来たものと思はれる。

また「絵巻物」の第八章「夢も現も」においても、叡子が大活躍しています。波多野爽波の弟・藤井霞人の車に虚子、叡子、田畑美穂女が乗り込み、美穂女が「最近句会で成績が悪いのは、三句出句して四句選に入つた夢を見たせいなんじゃないか」と頻りとこぼしました。ところが、いざ句会が始まるや、美穂女は三句出して三句とも選に入る



叡子の写生文「夢もうつつも」を虚子が訂正し「絵巻物」に転載



叡子の「夢もうつつも」が掲載された俳誌「比枝」 昭和27年6月号

好成績を獲得。その日の虚子句に「短夜や夢もうつ、も同じこと」がありました。まるで美穂女の好成績を予言したかの様な、摩訶不思議な句に叡子は魅せられ、忘れられない句会になったと語っています。叡子の写生文「夢もうつつも」は、俳誌「比枝」に掲載され、虚子はこれを一部訂正して「絵巻物」に転載しました。叡子の文章力は、虚子から太鼓判をもらったのです。

《椿子を円山川に流す提案》

「椿子物語」執筆以降、虚子は密かに「続椿子物語」を目論んでいました。また、余りに皆が可愛がつて髪を撫でる為か、椿子の髪が抜けて心配だと叡子から聞いていたので、髪が抜けて近い将来ゴミになる位なら、いつそ今椿子を叡子の手で供養する事で物語を完結させよう、と虚子は閃いたようです。

二十七年五月二十六日、高野山での句会を終え、難波へ向かう車中で、叡子は虚子から「椿子を円山川に流しませんか?」と提案を受けました。叡子は仰天し、「それだけは許して下さいませんか」と拒否しました。



口述筆記に虚子が訂正を入れた原稿「絵巻物」の第八章「夢も現も」

すると六月半ば、虚子から長い手紙が届きます。その頃叡子は縁談が進みつつありましたから、「椿子を川に流せとは、嫁ぐ者は過去を流して嫁がねばならぬという論し」だと理解したようです。それに対して虚子は、「あくまでゴミになる位なら流せと言った迄で、嫁いでも自分らしさは大切になさい」と、優しい言葉をかけてくれました。本展では全文をパネル展示しておりますので、是非御一読下さい。

椿子の供養を勧めるけれど、最終判断は叡子に任せるとの虚子の言葉に、叡子は杞陽夫妻と相談し、紙雛を作つて流す「形代流し」で折り合いを付けました。

そして七月十二日、二三枚紙を重ねて切り抜き、赤い帯を付けた七、八寸の形代を叡子を作り、形代流しが実行されました。降りしきる雨の中、玉置橋から円山川の濁流に投げ込むと、いきなり紙雛は沈んだと言います。

以上のように、二度にわたる椿子供養の提案は、叡子によって断固否定され、「形代流し」で代行されました。「絵巻物」第十五章「椿子流し」にも、虚子の無念さを残しつつ、事実がそのまま描かれています。一方「木兎」には、「椿子を川に流さないと、虚子先生の続編がいつまでたっても出来ないから、ああ早く流したい、流したい」と、ヤキモキする杞陽の本音が窺えます。虚子や叡子の事情をよく知る俳人達は、爆笑したことでしょう。

「絵巻物」において、「叡子は間もな

二十九年十月九日、虚子から叡子へ「タクヒナキ キクノチギリト コトホガル」(『旬日記』で「ことほぎぬ」に訂正)と祝句電報が届きました。また草之へも葉書で、「神々の饗^{みたせ}居る花野哉」が贈られています。

その一方で『七百五十句』には、「椿子句会もこれにて終わりにすると香笹の手紙にありければ」と前書がつき、「椿子も萩も芒も焼き捨てよ」という物騒な句も入集しています。虚子は「椿子流し」の後も、三度目の椿子供養を試みていました。二十八年には叡山に虚子の爪や髪を生前埋葬する虚子塔が建立されることから、その周辺を椿林にして、椿子も埋葬する事を提案しました。しかし、これも叡子に却下されました。さすがに虚子も、叡子の結婚を機に、自身の椿子への思いを断ち切るべく、「椿子も萩も芒も焼き捨てよ」と詠んだのではないのでしょうか。

結婚後、新居の報告をした千原夫妻

に、「私も好機があつたらお訪ね致します。ネストライクホーム（鳥の巣のよな家」と虚子が命名）を見に」という虚子の葉書が届きました。

そして翌三十年五月二十四日、遂に実現します。須磨浦公園で子規・虚子句碑を見学した虚子は、垂水区仲田町の高台にある新居を訪問し、「娘の家はたとひ狭くも風薫る」と、なんとも清々しい句を贈っています。



昭和30年5月24日 須磨観光ハウスにて撮影。
前列右より 岩木躑躅、虚子、五十嵐播水。
後列右より 貫一郎、穀子、草之、酒井氏。

俳句で結ばれた二人が、つましく幸福に暮してくれる事が、虚子にとって何よりの願いでした。かつて盲目の父の杖となつて肩を貸していた少女に、「あなたも俳句をやりなさい」と声をかけてくれた虚子に従い、生涯俳句に生きた叡子の人生は、「俳句は極楽の文学であることを、見事に体现しています」。

第七十五回六甲会
(令和六年四月五日) 稲畑 廣太郎 選

兼題「若緑・春昼」その他当季雑詠
第一句会入選句

景色さへ微睡んでをり春の昼
 天帝に高音を賦く春の忠
 わナールの光の庭や春の昼
 とかみどりこそとて天に芦屋川
 鳩塚の辺りもつと緑立つ
 鈴なりのキックオフ待つ松の葉
 緑摘む青春の夢摘まれけり
 老松も志あり若緑
 春屋や路地過ぐ猫の影二つ
 館内を奏するハープ春の昼
 春屋や車乗り上げ悲鳴あけ
 飛石の配置に松の忠
 松嶺や飛行機雲へ松の忠
 春昼や体半夢の中
 春昼の一吠えなき虎の檻
 春昼のシヨパンの極す静心
 春昼や虚空まぐさの句座の会
 春昼の狭き草木のしやへり出す
 若緑重たげ土手の松
 老練な庭師の手際緑摘む
 ケー1き焼けラム酒の香る春の昼
 長屋門残せに歴敷緑立つ
 芦屋浜先師を偲ぶ若緑
 品格の整ふ緑摘み終へて
 潮風に鍛へ抜かれた緑立つ
 居眠りを誘ふ敷式春の昼
 春昼やオープンカフェのＢランチ
 春昼の庵の詩宴の詩
 春昼の暗き隣天守へ
 若緑の床屋や顔の並しタオル
 若緑相洋の松の茎立タオル
 芦屋川視線をつなぐ松の忠
 緑立つスラング知らぬ孫娘
 千円の京庭園の緑立つ
 香に委ね一号放ち台の春の昼
 春昼に大谷一号放ち
 春昼や鉄路の車中ひとねわり
 浜風や育ちざかりの松の忠
 横にならぬ庭師休恩春の昼
 春昼の水のまどろむ芦屋川
 一と筋の恋まじしぐら緑立つ
 若緑寺の廻廊尽くまで
 春昼や潮音に声揃ふ鳥のこゑ
 若緑道活学生生揃ふ
 鳩塚を守る総生の若緑
 春屋やサッカ少年光蹴る
 山鳩のこゑ春昼の埴輪の目
 春昼やトンの紙紐さし春の昼
 春昼やドラントんと児を寝かせつ
 手をつなぎ歩きし記憶春の昼
 名園の水音風道若緑
 緑立つ白砂の道緑き
 春昼つ造酒屋や湖族の裔
 春昼や猫のあくびにつられをり
 〇煩杖のかくつと外れ春の昼
 一歩づつ激ま始めて若緑
 春昼の園に散舞パンダの死
 船頭の小唄に揺られ春の昼

[illegible]

湖岸待つ波音高し若緑春の昼
 住職は留守つて素直と柔軟さ
 緑より伸びる春直と柔軟さ
 夢のごとく過ぐる春屋緑の祝
 海光の弾ける春屋緑よつと
 春屋の水翠間の覗く
 春屋の刻とろとろと誰も来ず
 春屋の芝生子供にかへれさう
 雨もよし兼六園の若緑
 老猫のいびきに釣れる春の昼
 春屋の窓際の席五時間目
 春昼や間延びしてゐる猫と吾
 緑より浜を横切るクルザー
 春の昼町家の三和土すずみ
 春昼やばりりと落すと文庫本
 まなうらに赤き残像春の昼
 雨音は催麗師春の昼
 春昼や駅弁遊旅気分
 美術館句座にランチや春の昼
 春昼や至福の椅子を見つけた
 春昼の儘にならぬ艦船
 若緑越しの湖風一の茶室
 春昏し明るく満るの松の蕊
 若緑松はつくりはカナダ産
 太棒の響きくべん春の昼
 老松の次へと並木若緑
 芦屋川沿ひの笠木若緑立つ
 春昼やホームベースの塵払ふ
 若緑洩るる日さしのこまやかに
 春昼や鏡の中のある誰
 砂浜に傾いてゐる春の昼
 海風に傾く並木の緑立つ
 ロケットの発射失敗春の昼
 大寺の格千年の若緑
 若緑ビルの谷間に埋もる寺
 まつさらな風うまれゆくわかみどり
 春昼や衣桁にかかせる訪問着
 荒海の風雨蹴散らかす緑立つ
 ひとや居るの居ぬこと居りぬ春の昼
 春昼や机辺立ちと肘枕
 俳碑の詩の踊りだす春の昼
 緑に浴ふ流れ囁く春の昼
 睡立つ仁王像には力痛
 春昼や受話器のコードで直す
 つつとと天を飛がけて松の志
 春昼のプリンに光る銀の匙
 春昼に壊れるコト線り返し
 春昼や珈琲の香とヴィジュアル
 ホットケーキはわりと焼けて春の昼
 父と子の続かぬラリと春の昼
 春昼や町騒速き奥座敷
 潮風の消えゆく静寂若緑台
 パンダ過ぎる春昼昏く眠花台
 送る人送られる人春の昼
 朝光を集む指先陽炎へる
 業平も鶴も橋の名陽炎へる
 春昼のまどろみ刻み花時計
 寡黙なる主と話す春の昼
 手入れよき松の大小若緑
 春昼や二十年振りの春子帰る
 緑摘む竹の梯子を雲に掛け
 天を突く勢ひあり若緑
 春昼や頬杖つけば眠たり
 春昼の脳筋回つるテスト
 ひしめきて競ふ芦屋の松の志
 春昼の塊ごろころがし

[illegible]

第二句会入選句

菅見て入れば臘梅咲きし庭
歩をとめて臘梅の香をもう一度
臘梅のひと枝草に午後のお茶
列島を人々の影日脚伸ぶ
臘梅の香のたより遠く目に黄
臘梅の疎な響く地の息吹り
殿に着く初旅の六甲会
日脚伸ぶ道の錯覚見らに覚む
日脚伸ぶ言葉探す書く手紙
句会後のコーヒースロン日脚伸ぶ
天帝の機嫌よき日の日脚伸ぶ
雪の山背に下りてけふを生きる
香内を下山の母娘日脚伸ぶ
山風に臘梅の香へ透きとほる
夜あそびをりして臘梅の香に
日脚伸ぶ机上の俳句色褪せし
臘梅の光沢まるで琥珀かな
突き当る香に臘梅と判るまで
さらに明日の行動範囲日脚伸ぶ
臘梅の香の水平に來て選れる
臘梅の香の水平に來て選れる
鉛筆を削る臘梅に雨降り控へ
臘梅に浮き立つ心ありにけり
海光やとふばいの黄も香を深む
詠めよとて臘梅の香の満つる句座
日脚伸ぶ流転の序曲聞く野山
日脚伸ぶことも頼みて回復期
臘梅や甘き香りに魔性秘め
志す遊学の子に日脚伸ぶ
唐梅の静寂の中に匂ひけり
日脚伸ぶ帰りのつむぎて笑み隠し
誰か來るたび臘梅の鈴香る
万葉を連ね臘梅をわたり初む
さらさらと波音つむぎ日脚伸む
日脚伸ぶ海へ溶けゆく空の色
臘梅の風に聖歌を聞く空の色
臘梅の香に抱きかかて彼女來る
臘梅や表れを見に立ち寄らば
目を細む猫臘梅の開きけり
日脚伸ぶ窓の猫の大きくし
エナメル製のヒール履きたし日脚伸ぶ
臘梅の咲けば全開近き門
日脚伸ぶ記録更新歩数計
太陽の輝く臘梅の香の秘密
亡き母の好きたつ部屋日脚伸ぶ
臘梅の香の昇りゆく日脚伸ぶ
成時記の行の例日脚伸ぶ
臘梅や言葉なく自己主張
臘梅の甘く零せる昨夜の雨
日脚伸ぶ胸のボタンを一つ開け
日脚伸ぶ庭の草と言ふ名のけり
臘梅の千里へ届くれば日脚伸ぶ
鼻唄の聞こゆる野日脚伸ぶ

○令和六年三月
木の芽風時にはつる館の庭
天といふ遠き故郷梅咲ける
山笑ふ瀬戸内海をくすぐつて
物種を賑ふ賑ふ賑ふ賑ふ賑ふ
カフエラテにハートくつき三月來
華爾夫歌劇の街の女学生
ホームズと名前のつてゐる子猫
鐘の音と化し風情の談話室
剪定や迷ひに迷ひたる鏡
先輩の指のふるへや卒業歌

次回以降の六甲会のご案内

日時 令和7年6月6日(金)
兼題 万緑・夏の蝶
今後の予定 9月5日(金)、12月5日(金)

令和六年四月

○令和六年五月
青葉吸ひつゝ千の句俣長けり
松葉砂上にかく風をの綾
俳諧に大きな葉陰立夏かな
相説の話題きたる子供の日
焼きたる葉の葉の青里若葉
吐息と途絶え牡丹の影の
庭を覆ひつゝして姫女宛
フアゴットのリードを削る花は葉に
誇らしく記す師系や風は初夏

令和六年六月

○令和六年七月
透きとほることを離れて顔の花
汀子郎緑陰ふかくしづもれる
編み上げて孤独な宇宙蜘蛛の糸
杖を交差を母と山登
の思ふ華と風はハンモック
逆らはず徒はぬ妻心太
白靴の底なる貝のかけらかな
片陰にひしめき合ひて二軍の子
夜ふかしラムネ一びん夏のあじ
暑い日にコンビニ入る生徒多数

令和六年八月

○令和六年九月
鷹書一万尺の風に消ゆ
夕風を畳み足もとに寄る秋日
秋風の風は裏面にいふ音色
露草のきらめきに雨晴れてゆく
蟬鳴くや火星の紅き砂嵐
登高や杖で分け入る散道
九月来て聞き分けける風の音
エイがいるゆつくり下へ秋の水

令和六年十月

○令和六年十一月
冬帝に能登の平和を委ねけり
遙々と来し虚子記念館小春
尽しゆくいのちの色として紅葉
冬日和虚子の金庫の奥にまで
星空の育む初霜のあはひ
冬蝶の翅休めたる座禅石
解体も上棟もあり能登しぐれ
木道の二分したるや大花野
落葉積み重ねて秘密基地隠す
算数の宿題夜は暗い冬

令和六年十二月

○令和七年一月
待春の潮の香となる松林
米寿へと一歩門を出る初景色
初空の光の鼓動さし込みぬ
大寒の地を蹴る音の硬さかな
登り来て一目五万戸初景色
集ひたる帯の模様ある淑気
三十年を経ては街の悴みぬ
会へば直ぐ雪の深さを問ふ友等
ずる休みしたる天帝寒の晴
雪うさき何もなくとも消えないで

令和七年二月

○令和七年三月
虚子が守る次郎左門難かな
春灯の照らす明治のホトギス
心竹の朱墨の雪あたたかし
雪男には素通りの雪女
春を待つ君の指先眠るアノ
深夜二時過ぎ無言のやんちゃん
薄氷のひかりひきつぐ雷かな
盆梅に見ゆる古木の気品かな
転校の友へ寄せ書きクロッカス
梅咲いて石山寺へ道は坂

令和七年四月

○令和七年五月
青葉吸ひつゝ千の句俣長けり
松葉砂上にかく風をの綾
俳諧に大きな葉陰立夏かな
相説の話題きたる子供の日
焼きたる葉の葉の青里若葉
吐息と途絶え牡丹の影の
庭を覆ひつゝして姫女宛
フアゴットのリードを削る花は葉に
誇らしく記す師系や風は初夏

令和七年六月

○令和七年七月
透きとほることを離れて顔の花
汀子郎緑陰ふかくしづもれる
編み上げて孤独な宇宙蜘蛛の糸
杖を交差を母と山登
の思ふ華と風はハンモック
逆らはず徒はぬ妻心太
白靴の底なる貝のかけらかな
片陰にひしめき合ひて二軍の子
夜ふかしラムネ一びん夏のあじ
暑い日にコンビニ入る生徒多数

令和七年八月

○令和七年九月
鷹書一万尺の風に消ゆ
夕風を畳み足もとに寄る秋日
秋風の風は裏面にいふ音色
露草のきらめきに雨晴れてゆく
蟬鳴くや火星の紅き砂嵐
登高や杖で分け入る散道
九月来て聞き分けける風の音
エイがいるゆつくり下へ秋の水

令和七年十月

○令和七年十一月
冬帝に能登の平和を委ねけり
遙々と来し虚子記念館小春
尽しゆくいのちの色として紅葉
冬日和虚子の金庫の奥にまで
星空の育む初霜のあはひ
冬蝶の翅休めたる座禅石
解体も上棟もあり能登しぐれ
木道の二分したるや大花野
落葉積み重ねて秘密基地隠す
算数の宿題夜は暗い冬

令和七年十二月

○令和七年一月
待春の潮の香となる松林
米寿へと一歩門を出る初景色
初空の光の鼓動さし込みぬ
大寒の地を蹴る音の硬さかな
登り来て一目五万戸初景色
集ひたる帯の模様ある淑気
三十年を経ては街の悴みぬ
会へば直ぐ雪の深さを問ふ友等
ずる休みしたる天帝寒の晴
雪うさき何もなくとも消えないで

令和七年二月

○令和七年三月
虚子が守る次郎左門難かな
春灯の照らす明治のホトギス
心竹の朱墨の雪あたたかし
雪男には素通りの雪女
春を待つ君の指先眠るアノ
深夜二時過ぎ無言のやんちゃん
薄氷のひかりひきつぐ雷かな
盆梅に見ゆる古木の気品かな
転校の友へ寄せ書きクロッカス
梅咲いて石山寺へ道は坂

令和七年四月

○令和七年五月
青葉吸ひつゝ千の句俣長けり
松葉砂上にかく風をの綾
俳諧に大きな葉陰立夏かな
相説の話題きたる子供の日
焼きたる葉の葉の青里若葉
吐息と途絶え牡丹の影の
庭を覆ひつゝして姫女宛
フアゴットのリードを削る花は葉に
誇らしく記す師系や風は初夏

令和七年六月

○令和七年七月
透きとほることを離れて顔の花
汀子郎緑陰ふかくしづもれる
編み上げて孤独な宇宙蜘蛛の糸
杖を交差を母と山登
の思ふ華と風はハンモック
逆らはず徒はぬ妻心太
白靴の底なる貝のかけらかな
片陰にひしめき合ひて二軍の子
夜ふかしラムネ一びん夏のあじ
暑い日にコンビニ入る生徒多数

令和七年八月

○令和七年九月
鷹書一万尺の風に消ゆ
夕風を畳み足もとに寄る秋日
秋風の風は裏面にいふ音色
露草のきらめきに雨晴れてゆく
蟬鳴くや火星の紅き砂嵐
登高や杖で分け入る散道
九月来て聞き分けける風の音
エイがいるゆつくり下へ秋の水

令和七年十月

○令和七年十一月
冬帝に能登の平和を委ねけり
遙々と来し虚子記念館小春
尽しゆくいのちの色として紅葉
冬日和虚子の金庫の奥にまで
星空の育む初霜のあはひ
冬蝶の翅休めたる座禅石
解体も上棟もあり能登しぐれ
木道の二分したるや大花野
落葉積み重ねて秘密基地隠す
算数の宿題夜は暗い冬

令和七年十二月

○令和七年一月
待春の潮の香となる松林
米寿へと一歩門を出る初景色
初空の光の鼓動さし込みぬ
大寒の地を蹴る音の硬さかな
登り来て一目五万戸初景色
集ひたる帯の模様ある淑気
三十年を経ては街の悴みぬ
会へば直ぐ雪の深さを問ふ友等
ずる休みしたる天帝寒の晴
雪うさき何もなくとも消えないで

令和七年二月

○令和七年三月
虚子が守る次郎左門難かな
春灯の照らす明治のホトギス
心竹の朱墨の雪あたたかし
雪男には素通りの雪女
春を待つ君の指先眠るアノ
深夜二時過ぎ無言のやんちゃん
薄氷のひかりひきつぐ雷かな
盆梅に見ゆる古木の気品かな
転校の友へ寄せ書きクロッカス
梅咲いて石山寺へ道は坂

令和七年四月

○令和七年五月
青葉吸ひつゝ千の句俣長けり
松葉砂上にかく風をの綾
俳諧に大きな葉陰立夏かな
相説の話題きたる子供の日
焼きたる葉の葉の青里若葉
吐息と途絶え牡丹の影の
庭を覆ひつゝして姫女宛
フアゴットのリードを削る花は葉に
誇らしく記す師系や風は初夏

令和七年六月

○令和七年七月
透きとほることを離れて顔の花
汀子郎緑陰ふかくしづもれる
編み上げて孤独な宇宙蜘蛛の糸
杖を交差を母と山登
の思ふ華と風はハンモック
逆らはず徒はぬ妻心太
白靴の底なる貝のかけらかな
片陰にひしめき合ひて二軍の子
夜ふかしラムネ一びん夏のあじ
暑い日にコンビニ入る生徒多数

令和七年八月

○令和七年九月
鷹書一万尺の風に消ゆ
夕風を畳み足もとに寄る秋日
秋風の風は裏面にいふ音色
露草のきらめきに雨晴れてゆく
蟬鳴くや火星の紅き砂嵐
登高や杖で分け入る散道
九月来て聞き分けける風の音
エイがいるゆつくり下へ秋の水

令和七年十月

○令和七年十一月
冬帝に能登の平和を委ねけり
遙々と来し虚子記念館小春
尽しゆくいのちの色として紅葉
冬日和虚子の金庫の奥にまで
星空の育む初霜のあはひ
冬蝶の翅休めたる座禅石
解体も上棟もあり能登しぐれ
木道の二分したるや大花野
落葉積み重ねて秘密基地隠す
算数の宿題夜は暗い冬

令和七年十二月

○令和七年一月
待春の潮の香となる松林
米寿へと一歩門を出る初景色
初空の光の鼓動さし込みぬ
大寒の地を蹴る音の硬さかな
登り来て一目五万戸初景色
集ひたる帯の模様ある淑気
三十年を経ては街の悴みぬ
会へば直ぐ雪の深さを問ふ友等
ずる休みしたる天帝寒の晴
雪うさき何もなくとも消えないで

令和七年二月

○令和七年三月
虚子が守る次郎左門難かな
春灯の照らす明治のホトギス
心竹の朱墨の雪あたたかし
雪男には素通りの雪女
春を待つ君の指先眠るアノ
深夜二時過ぎ無言のやんちゃん
薄氷のひかりひきつぐ雷かな
盆梅に見ゆる古木の気品かな
転校の友へ寄せ書きクロッカス
梅咲いて石山寺へ道は坂

令和七年四月

○令和七年五月
青葉吸ひつゝ千の句俣長けり
松葉砂上にかく風をの綾
俳諧に大きな葉陰立夏かな
相説の話題きたる子供の日
焼きたる葉の葉の青里若葉
吐息と途絶え牡丹の影の
庭を覆ひつゝして姫女宛
フアゴットのリードを削る花は葉に
誇らしく記す師系や風は初夏

令和七年六月

○令和七年七月
透きとほることを離れて顔の花
汀子郎緑陰ふかくしづもれる
編み上げて孤独な宇宙蜘蛛の糸
杖を交差を母と山登
の思ふ華と風はハンモック
逆らはず徒はぬ妻心太
白靴の底なる貝のかけらかな
片陰にひしめき合ひて二軍の子
夜ふかしラムネ一びん夏のあじ
暑い日にコンビニ入る生徒多数

令和七年八月

○令和七年九月
鷹書一万尺の風に消ゆ
夕風を畳み足もとに寄る秋日
秋風の風は裏面にいふ音色
露草のきらめきに雨晴れてゆく
蟬鳴くや火星の紅き砂嵐
登高や杖で分け入る散道
九月来て聞き分けける風の音
エイがいるゆつくり下へ秋の水

令和七年十月

○令和七年十一月
冬帝に能登の平和を委ねけり
遙々と来し虚子記念館小春
尽しゆくいのちの色として紅葉
冬日和虚子の金庫の奥にまで
星空の育む初霜のあはひ
冬蝶の翅休めたる座禅石
解体も上棟もあり能登しぐれ
木道の二分したるや大花野
落葉積み重ねて秘密基地隠す
算数の宿題夜は暗い冬

令和七年十二月

○令和七年一月
待春の潮の香となる松林
米寿へと一歩門を出る初景色
初空の光の鼓動さし込みぬ
大寒の地を蹴る音の硬さかな
登り来て一目五万戸初景色
集ひたる帯の模様ある淑気
三十年を経ては街の悴みぬ
会へば直ぐ雪の深さを問ふ友等
ずる休みしたる天帝寒の晴
雪うさき何もなくとも消えないで

令和七年二月

○令和七年三月
虚子が守る次郎左門難かな
春灯の照らす明治のホトギス
心竹の朱墨の雪あたたかし
雪男には素通りの雪女
春を待つ君の指先眠るアノ
深夜二時過ぎ無言のやんちゃん
薄氷のひかりひきつぐ雷かな
盆梅に見ゆる古木の気品かな
転校の友へ寄せ書きクロッカス
梅咲いて石山寺へ道は坂

令和七年四月

○令和七年五月
青葉吸ひつゝ千の句俣長けり
松葉砂上にかく風をの綾
俳諧に大きな葉陰立夏かな
相説の話題きたる子供の日
焼きたる葉の葉の青里若葉
吐息と途絶え牡丹の影の
庭を覆ひつゝして姫女宛
フアゴットのリードを削る花は葉に
誇らしく記す師系や風は初夏

令和七年六月

○令和七年七月
透きとほることを離れて顔の花
汀子郎緑陰ふかくしづもれる
編み上げて孤独な宇宙蜘蛛の糸
杖を交差を母と山登
の思ふ華と風はハンモック
逆らはず徒はぬ妻心太
白靴の底なる貝のかけらかな
片陰にひしめき合ひて二軍の子
夜ふかしラムネ一びん夏のあじ
暑い日にコンビニ入る生徒多数

令和七年八月

○令和七年九月
鷹書一万尺の風に消ゆ
夕風を畳み足もとに寄る秋日
秋風の風は裏面にいふ音色
露草のきらめきに雨晴れてゆく
蟬鳴くや火星の紅き砂嵐
登高や杖で分け入る散道
九月来て聞き分けける風の音
エイがいるゆつくり下へ秋の水

令和七年十月

○令和七年十一月
冬帝に能登の平和を委ねけり
遙々と来し虚子記念館小春
尽しゆくいのちの色として紅葉
冬日和虚子の金庫の奥にまで
星空の育む初霜のあはひ
冬蝶の翅休めたる座禅石
解体も上棟もあり能登しぐれ
木道の二分したるや大花野
落葉積み重ねて秘密基地隠す
算数の宿題夜は暗い冬

令和七年十二月

○令和七年一月
待春の潮の香となる松林
米寿へと一歩門を出る初景色
初空の光の鼓動さし込みぬ
大寒の地を蹴る音の硬さかな
登り来て一目五万戸初景色
集ひたる帯の模様ある淑気
三十年を経ては街の悴みぬ
会へば直ぐ雪の深さを問ふ友等
ずる休みしたる天帝寒の晴
雪うさき何もなくとも消えないで

令和七年二月

○令和七年三月
虚子が守る次郎左門難かな
春灯の照らす明治のホトギス
心竹の朱墨の雪あたたかし
雪男には素通りの雪女
春を待つ君の指先眠るアノ
深夜二時過ぎ無言のやんちゃん
薄氷のひかりひきつぐ雷かな
盆梅に見ゆる古木の気品かな
転校の友へ寄せ書きクロッカス
梅咲いて石山寺へ道は坂

令和七年四月

○令和七年五月
青葉吸ひつゝ千の句俣長けり
松葉砂上にかく風をの綾
俳諧に大きな葉陰立夏かな
相説の話題きたる子供の日
焼きたる葉の葉の青里若葉
吐息と途絶え牡丹の影の
庭を覆ひつゝして姫女宛
フアゴットのリードを削る花は葉に
誇らしく記す師系や風は初夏

令和七年六月

○令和七年七月
透きとほることを離れて顔の花
汀子郎緑陰ふかくしづもれる
編み上げて孤独な宇宙蜘蛛の糸
杖を交差を母と山登
の思ふ華と風はハンモック
逆らはず徒はぬ妻心太
白靴の底なる貝のかけらかな
片陰にひしめき合ひて二軍の子
夜ふかしラムネ一びん夏のあじ
暑い日にコンビニ入る生徒多数

令和七年八月

○令和七年九月
鷹書一万尺の風に消ゆ
夕風を畳み足もとに寄る秋日
秋風の風は裏面にいふ音色
露草のきらめきに雨晴れてゆく
蟬鳴くや火星の紅き砂嵐
登高や杖で分け入る散道
九月来て聞き分けける風の音
エイがいるゆつくり下へ秋の水

令和七年十月

○令和七年十一月
冬帝に能登の平和を委ねけり
遙々と来し虚子記念館小春
尽しゆくいのちの色として紅葉
冬日和虚子の金庫の奥にまで
星空の育む初霜のあはひ
冬蝶の翅休めたる座禅石
解体も上棟もあり能登しぐれ
木道の二分したるや大花野
落葉積み重ねて秘密基地隠す
算数の宿題夜は暗い冬

令和七年十二月

○令和七年一月
待春の潮の香となる松林
米寿へと一歩門を出る初景色
初空の光の鼓動さし込みぬ
大寒の地を蹴る音の硬さかな
登り来て一目五万戸初景色
集ひたる帯の模様ある淑気
三十年を経ては街の悴みぬ
会へば直ぐ雪の深さを問ふ友等
ずる休みしたる天帝寒の晴
雪うさき何もなくとも消えないで

令和七年二月

○令和七年三月
虚子が守る次郎左門難かな
春灯の照らす明治のホトギス
心竹の朱墨の雪あたたかし
雪男には素通りの雪女
春を待つ君の指先眠るアノ
深夜二時過ぎ無言のやんちゃん
薄氷のひかりひきつぐ雷かな
盆梅に見ゆる古木の気品かな
転校の友へ寄せ書きクロッカス
梅咲いて石山寺へ道は坂

令和七年四月

○令和七年五月
青葉吸ひつゝ千の句俣長けり
松葉砂上にかく風をの綾
俳諧に大きな葉陰立夏かな
相説の話題きたる子供の日
焼きたる葉の葉の青里若葉
吐息と途絶え牡丹の影の
庭を覆ひつゝして姫女宛
フアゴットのリードを削る花は葉に
誇らしく記す師系や風は初夏

令和七年六月

○令和七年七月
透きとほることを離れて顔の花
汀子郎緑陰ふかくしづもれる
編み上げて孤独な宇宙蜘蛛の糸
杖を交差を母と山登
の思ふ華と風はハンモック
逆らはず徒はぬ妻心太
白靴の底なる貝のかけらかな
片陰にひしめき合ひて二軍の子
夜ふかしラムネ一びん夏のあじ
暑い日にコンビニ入る生徒多数

令和七年八月

○令和七年九月
鷹書一万尺の風に消ゆ
夕風を畳み足もとに寄る秋日
秋風の風は裏面にいふ音色
露草のきらめきに雨晴れてゆく
蟬鳴くや火星の紅き砂嵐
登高や杖で分け入る散道
九月来て聞き分けける風の音
エイがいるゆつくり下へ秋の水

令和七年十月

○令和七年十一月
冬帝に能登の平和を委ねけり
遙々と来し虚子記念館小春
尽しゆくいのちの色として紅葉
冬日和虚子の金庫の奥にまで
星空の育む初霜のあはひ
冬蝶の翅休めたる座禅石
解体も上棟もあり能登しぐれ
木道の二分したるや大花野
落葉積み重ねて秘密基地隠す
算数の宿題夜は暗い冬

令和七年十二月

○令和七年一月
待春の潮の香となる松林
米寿へと一歩門を出る初景色
初空の光の鼓動さし込みぬ
大寒の地を蹴る音の硬さかな
登り来て一目五万戸初景色
集ひたる帯の模様ある淑気
三十年を経ては街の悴みぬ
会へば直ぐ雪の深さを問ふ友等
ずる休みしたる天帝寒の晴
雪うさき何もなくとも消えないで

令和七年二月

○令和七年三月
虚子が守る次郎左門難かな
春灯の照らす明治のホトギス
心竹の朱墨の雪あたたかし
雪男には素通りの雪女
春を待つ君の指先眠るアノ
深夜二時過ぎ無言のやんちゃん
薄氷のひかりひきつぐ雷かな
盆梅に見ゆる古木の気品かな
転校の友へ寄せ書きクロッカス
梅咲いて石山寺へ道は坂

令和七年四月

○令和七年五月
青葉吸ひつゝ千の句俣長けり
松葉砂上にかく風をの綾
俳諧に大きな葉陰立夏かな
相説の話題きたる子供の日
焼きたる葉の葉の青里若葉
吐息と途絶え牡丹の影の
庭を覆ひつゝして姫女宛
フアゴットのリードを削る花は葉に
誇らしく記す師系や風は初夏

令和七年六月

○令和七年七月
透きとほることを離れて顔の花
汀子郎緑陰ふかくしづもれる
編み上げて孤独な宇宙蜘蛛の糸
杖を交差を母と山登
の思ふ華と風はハンモック
逆らはず徒はぬ妻心太
白靴の底なる貝のかけらかな
片陰にひしめき合ひて二軍の子
夜ふかしラムネ一びん夏のあじ
暑い日にコンビニ入る生徒多数

令和七年八月

○令和七年九月
鷹書一万尺の風に消ゆ
夕風を畳み足もとに寄る秋日
秋風の風は裏面にいふ音色
露草のきらめきに雨晴れてゆく
蟬鳴くや火星の紅き砂嵐
登高や杖で分け入る散道
九月来て聞き分けける風の音
エイがいるゆつくり下へ秋の水

令和七年十月

○令和七年十一月
冬帝に能登の平和を委ねけり
遙々と来し虚子記念館小春
尽しゆくいのちの色として紅葉
冬日和虚子の金庫の奥にまで
星空の育む初霜のあはひ
冬蝶の翅休めたる座禅石
解体も上棟もあり能登しぐれ
木道の二分したるや大花野
落葉積み重ねて秘密基地隠す
算数の宿題夜は暗い冬

令和七年十二月

○令和七年一月
待春の潮の香となる松林
米寿へと一歩門を出る初景色
初空の光の鼓動さし込みぬ
大寒の地を蹴る音の硬さかな
登り来て一目五万戸初景色
集ひたる帯の模様ある淑気
三十年を経ては街の悴みぬ
会へば直ぐ雪の深さを問ふ友等
ずる休みしたる天帝寒の晴
雪うさき何もなくとも消えないで

令和七年二月

○令和七年三月
虚子が守る次郎左門難かな
春灯の照らす明治のホトギス
心竹の朱墨の雪あたたかし
雪男には素通りの雪女
春を待つ君の指先眠るアノ
深夜二時過ぎ無言のやんちゃん
薄氷のひかりひきつぐ雷かな
盆梅に見ゆる古木の気品かな
転校の友へ寄せ書きクロッカス
梅咲いて石山寺へ道は坂

令和七年四月

○令和七年五月
青葉吸ひつゝ千の句俣長けり
松葉砂上にかく風をの綾
俳諧に大きな葉陰立夏かな
相説の話題きたる子供の日
焼きたる葉の葉の青里若葉
吐息と途絶え牡丹の影の
庭を覆ひつゝして姫女宛
フアゴットのリードを削る花は葉に
誇らしく記す師系や風は初夏

令和七年六月

○令和七年七月
透きとほることを離れて顔の花
汀子郎緑陰ふかくしづもれる
編み上げて孤独な宇宙蜘蛛の糸
杖を交差を母と山登
の思ふ華と風はハンモック
逆らはず徒はぬ妻心太
白靴の底なる貝のかけらかな
片陰にひしめき合ひて二軍の子
夜ふかしラムネ一びん夏のあじ
暑い日にコンビニ入る生徒多数

令和七年八月

○令和七年九月
鷹書一万尺の風に消ゆ
夕風を畳み足もとに寄る秋日
秋風の風は裏面にいふ音色
露草のきらめきに雨晴れてゆく
蟬鳴くや火星の紅き砂嵐
登高や杖で分け入る散道
九月来て聞き分けける風の音
エイがいるゆつくり下へ秋の水

令和七年十月

○令和七年十一月
冬帝に能登の平和を委ねけり
遙々と来し虚子記念館小春
尽しゆくいのちの色として紅葉
冬日和虚子の金庫の奥にまで
星空の育む初霜のあはひ
冬蝶の翅休めたる座禅石
解体も上棟もあり能登しぐれ
木道の二分したるや大花野
落葉積み重ねて秘密基地隠す
算数の宿題夜は暗い冬

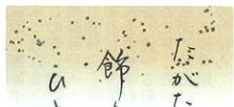
令和七年十二月

○令和七年一月
待春の潮の香となる松林
米寿へと一歩門を出る初景色
初空の光の鼓動さし込みぬ
大寒の地を蹴る音の硬さかな

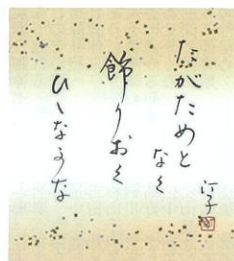
花の歳時記

雜

稲畑汀子遺愛の雛人形は、毎年春に自宅二階の和室に飾られ、句会に集う俳人の目を楽しませ、俳句の題材になってきた。次郎左衛門雛は、江戸時代には京都の人形師雛屋次郎左衛門が創始し、そのまま雛人形の名称となった。丸い顔に小さな口元と細い目、小さな鉤鼻、絵巻物そのままの雰囲気の特徴である汀子が大変こだわって自ら大阪松屋町の人形店まで何度も足を運んで選び購入した品という。



ふがためと
なと
飾りおと
いへうな



汀子色紙「雛」

飾りおく
たがためとなく
ひゝなかな
汀子
(昭和四十八年)

現在は虚子記
念文学館の所蔵
となり、二月か
ら桃の節句まで
自筆の句色紙と
ともに談話室に
飾られる。

第十八回 虛子生誕記念俳句祭開催

令和七年二月十六日(日)、第十八回虚子生誕記念俳句祭が開催されました。後援頂いた芦屋市より、芦屋市長 高島峻輔氏、教育長 野村大祐氏がご参加くださいました。ご挨拶をいただき、芦屋市長賞並びに芦屋市教育長賞授賞プレゼンターをお努めくださいました。



記念講演「虚

記念講演「虚子自伝を読む」では、令和六年四月に岩波書店より刊行された『新編虚子自伝』著者 岸本尚毅氏を講師に招き、虚子が生涯に著した数冊の自伝を横断的に読むことによりて見えて来る差異、その理由、ちよつと隠れたおもしろさなどを、楽しくわかりやすく解説されました。



記念講演「虚子自伝を読む」
講師 岸本尚毅氏



芦屋市長、芦屋市教育長と選者、受賞者の皆様

賛助会更新と
ご寄附のご案内

会員の皆様には、令和六年度の更新をお願い申し上げます。賛助会は、虚子記念文学館を応援してください。新規定でもご参加いただけます。新規のご入会を歓迎いたします。（一年度分会費 一口二万円）

俳傳やご金額にかかわらない小口ご寄附、虚子記念文学館に末永く御句を掲出する俳傳も随時受け付けております。公益法人へのご寄附として税控除の対象となりますので、お問い合わせくださいませ。

館の運営には、皆様のお力添えが欠かせません。どうぞよろしくお願い申し上げます。

理事会・評議員会報告

公益財団法人虚子記念文学館理事会、評議員会が開催され、次のことが審議決定されました。

(令和六年五月)

・令和五年度事業報告と決算

（令和七年三月）

・令和七年度事業計画と予算

虚子記念文学館館報 第四十四号

令和七年五月一日

編集・発行 虚子記念文学館

千六五九—〇〇七四

兵庫県芦屋市平田町八十二
電話(〇七九七)二一〇三六

FAX (〇七九七) 三二一—一三〇六

HP フォトレス: <http://www.kyoshi.or.jp/>

e-mail フトリス: kyoshi@as.email.ne.jp

◆令和7(2025)年度 虚子記念文学館休館日カレンダー◆

令和7年

1月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

2月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

3月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

4月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

5月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

6月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

7月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

8月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

9月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

10月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4		
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

11月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

12月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

令和8年

1月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

2月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28

3月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

休館日（●印）毎週月曜日、祝日の翌平日、夏期、年末年始 他
やむを得ず臨時閉館させていただく場合があります。
展示替期間中は、一部ご覧いただけない箇所もございます。